

雲迅き月に並べり厨芥車 『鷗』収録

昭和29年作。〈こゝには雲の飛ぶ月天、轆（ながえ）を地について、全く物として並び置かれた厨芥車だけが描かれてゐる。色も、音も、勿論ないわけではないが、この句ではそれらも無いものとして、黒白の明暗としてしか描かれていない。〉とは、石田波郷の選評の一節である。これに付け加えることばはないが、写生句におけるこういう省略の仕方が、受け入れられがたくなってしまったことを、ただただ悲しいと思う。

旅の夜の暈にはづめ木の実独楽 『鷗』収録

作句年不明。昭和三十年代かと考えたのは、幼子だった私たち姉弟に、木の実の独楽をつくってくれた景を思い浮かべたから。ひと家族がそんな素朴な遊びに興じている姿は、一家の主として嬉しく誇らしくもあつただろう。命令形を使った調べの高さに、それが感じられるのである。

この二句は、「鶴」時代の句。

<石田勝彦プロフィール>

本名・和郎。大正9年、札幌市生まれ。昭和29年「鶴」入会、石田波郷に師事。波郷没後、昭和49年「泉」創刊に参加、のちに代表。平成16年没。句集に『雙杵』『百千』『秋興』、選集『鷗』、遺句集『秋興以後』。郷子は勝彦の長女。